



TITLE:

スミスの歴史學的教養と環境 - 特に彼の前半生に就いて -

AUTHOR(S):

竹中, 靖一

CITATION:

竹中, 靖一. スミスの歴史學的教養と環境 - 特に彼の前半生に就いて -. 經濟論叢 1932, 35(1): 141-148

ISSUE DATE:

1932-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130195>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 一 第

卷五十三第

行發日一月七年七和昭

論 叢

經濟統制の理論的根據

經濟學博士 作田 莊一

租税と公益

法學博士 神戸 正雄

政治算術附地方算法に就きて

法學博士 財部 靜治

時 論

恐慌打開策としての『購買力補給案』

經濟學士 谷口 吉彦

研 究

統計比率に就いて

經濟學士 蜷川 虎三

金數量説の發展に就いて

經濟學士 松岡 孝兒

幕末の財政紊亂について

經濟學士 大山 敷太郎

説 苑

貨幣の主觀價值について

經濟學士 柴田 敬

金融機關としての預金銀行の地位

經濟學士 中谷 實

スミスの歴史學的教養と環境

經濟學士 竹中 靖一

附 録

新着外國經濟雜誌主要論題

スミスの歴史學的教養

と環境

——特に彼の前半生に就いて——

竹中靖一

一、序言

一個の學問體系は、社會的歴史の實在に制約せられつゝ、個人によつて形成される。故に、その學問體系を充分に理解せんとするならば、その直接の母體となりし學者の個人的生活とそれを生み出せる社會的歴史的背景とをも、併せ見なければならぬ。⁰¹⁾ この意味に於いて、私は茲にアダム・スミスの歴史學的教養とその背景となりし當時の英國歴史學界の事情を述べて、彼の經濟學說を理解する上の一助としたい。彼の傳記に關しては、先年彼の生誕二百年を記念して、多くの學者によつて既に紹介せられた所であるが、歴史家としての彼の教養に就いて特に注意せられたものは少ない。

1) 石川教授『精神科學的經濟學の基礎問題』三六頁參照

かつたと思はれる。スミスは經濟學の父であると共に、また偉大なる歴史家であつた。『富國民論』を繙くならば、その多くの頁に於いて、非常に豊富なる歴史的敘述を見出すであらう。私はかくの如き豊富なる歴史的敘述を可能ならしめた所の彼の歴史學的教養と環境とを見たいのである。

スミスの生涯(一七二三—一七九〇年)は、學問的教養乃至は勞作上より見れば、彼が大學教授を辭して、フランス遊學の途に着いた一七六四年を境として、前後二期に分ち得るかと思はれる。その前半は、彼が主として哲學に興味をもちし時期にして、『道德情操論』によつて代表さるゝものであるが、その後半は、云ふ迄もなく『富國民論』の著述に心血を注ぎし時期であつた。然るに、哲學的關心の支配せし前半生に於いても、彼は既に歴史研究に興味を覺え、後年『富國民論』の中にあらはるゝ如き深き歴史學的教養を準備しつゝあつたのである。私は、先づ、その時代の歴史學的環境との聯關に於いて、それを窺はうと思ふ。

二、英國に於ける歴史學の勃興

十九世紀が『史學の世紀』なる榮譽を擔ふに反し、十八世紀の啓蒙主義は普通には非歴史的であると非難される。併し、この啓蒙主義は、人類の連帶と進歩との觀念をすべての國民と時代との上に擴げることによつて、却つて、一の新らしい歴史觀を齎したのである。

經驗的觀察自身の中から普遍歴史の聯關が成立し、因果關係の中にすべての事象を結合することによつて合理的な歴史が生れ、與へられた現實の中に止つて、形而上學的觀念を却けることによつて批判的な考察が行はれた。そして、かくの如き歴史觀察の方法に基いて、初めて、自然認識と歴史學との科學的結合が可能となつた。自然科學上の諸假設が、進化の理念によつて、歴史の事象と結合さるゝに至つたのである。²⁾

かゝる新らしき歴史敘述の理想は、先づ、フランス啓蒙主義哲學者、ヴォルテール、モンテスキュー、チユルゴーによつて把握せられたが、それは、やがて英

2) 同書二九七頁以下。尙、拙稿『富國論に於ける歴史的敘述』(經濟史研究第九號)參照

3) Vgl. W. Dilthey, Gesammelte Schriften. Bd. III. S. 209. ff.

國へ輸入されて、ヒューム、ロバートソン、ギボン、などの歴史學的大著の中にその實現を見た。而も、英國は、ロック以來、經驗哲學の郷土であつて、人間の本性に關する認識論的な、心理學的な研究が盛に行はれており、それが、この新しい歴史觀と結ばれて、人間性の心理的分析に基き、過去の歴史が顧みられ、その中に現代に至るまでの人間性の發展が觀察せられたのである。かくの如きは、勿論、眞の意味の『歴史性』を見たのではない。それは只發展の諸段階を見、合理的なものゝ進歩を見たのみであり、歴史の中の暗い、深いものは、彼らには顧みられなかつた。従つて、中世の眞の意味は把握さるべくもなかつたのである。しかし乍ら、彼等は、ともかくも、過去を顧みて歴史を研究し、後に來る十九世紀歴史學興隆のために、素地を作つたと考へることが出来るであらう。

ヒュームは、『英國史』History of England. (1754—61)を著はして、人民の自由と國家權力との調和の問題を考へた。ロバートソンは、『チャールス五世史』

スミスの歴史學的教養と環境

History of the Reign of the Emperor Charles V. (1769)の中に近代國家の成立を説いた。有名なギボンの『羅馬衰亡史』History of the Decline and Fall of the Roman Empire. (1776—88)は、世界最強の帝國の衰亡を取扱つて、諸民族と諸國家との内的狀態を政治史の觀點より美事に描寫した。これらは何れも啓蒙主義歴史學の最大傑作であるが、當時の英國には、尙この他にも、ジェムス・スミス、ファーマガツソン、モンボードー、ケイムス卿等々、有能なる歴史家が輩出して、多くの歴史學的勞作を残してゐる。

かくて、十八世紀後半は、英國の歴史學がフランス啓蒙主義哲學を受入れて未曾有の發展をなせる時であつた。スミスの青年時代は、まさにかゝる史學勃興の機運生れつゝある時期にあたり、一七五一年彼の大學教授就任以後は、この歴史學興隆の唯中にあつた。而も、彼はこれら諸歴史家と親交を結び、殊にヒュームは彼の生涯に於ける最も親しかりし友人であつた。當時スミスの關心の中心にありし哲學的研究も、かくの如き

4) Dilthey, a. a. O. S. 244-6.; E. Fueter, Geschichte der neueren Historiographie. S. 363. ff.

環境にあつて、常に歴史研究と結ばれて、歴史の中に理論の經驗的基礎が尋ねられ、逆に、また心理的事實の分析は、謂はば、歴史研究の準備ともなつた。

三、青年時代のスミス

グラスゴー大學に在學中、スミスは當時有名なりしダンロップ教授から傑れたる羅典語と希臘語との講義を聞くことを得たが、それは、後年彼が古典に親しむる爲のよき準備となつた。また、彼の所謂『決して忘れてならぬ』ハッチソン教授は、彼をしてヒュームの『人性論』の抄録を作らしめ、こゝにヒュームとの最初の接觸が與へられた。併し、スミスの學問的關心は、この時、主として數學と自然科学とに向つており、歴史研究は、尙彼の興味をそゝるものではなかつたのである。

然るに一七四〇年、⁶⁾ オックスフォード大學へ入學すると共に、彼の學問的關心は一轉期を劃さねばならなかつた。當時、オックスフォードは舊思想の巢窟であり、或日、彼がヒュームの『人性論』を讀んでゐる所を

見付かつてその書物を取上げられたこともあつた。⁷⁾ 加之、スコットランド出身の學生はこの大學では繼子扱にされてゐたから、彼には親しい友人もなく、只讀書のみが唯一の慰安であつた。而も、この大學の圖書館には多くの古典が彼を待つてゐた。かくて、彼は、毎日、そこで希臘、羅馬、イタリー、フランスの古典を愛讀した。後年、彼が古典に關する非常に該博な而も精確な知識をもつてゐたのは、全くこの時の賜物であつた。⁸⁾ 彼が特に人類の政治史に興味をもち始めたのも亦この頃である。⁹⁾ 陰慘な宗教的なこの大學の雰圍氣が、グラスゴーで抱いてゐた彼の自由なる數學的自然科学的研究をおさへ、古典の世界、歴史の世界へ、彼を沈潜せしめたのであつた。

やがて、一八四六年、彼は不愉快なオックスフォードを去つて、郷里なる慈母の許で、好む所の研究に耽ることゝなつた。天文學史に關する彼の遺稿は、恐らくこの間に執筆されしものと推定される。¹⁰⁾ それは、『天文學の歴史によつて説明さるゝ、哲學的研究を指導し指

- 5) Dugald Stewart, Collected Works. Vol. X. p. 7.; J. Rae, Life of Adam Smith. pp. 11-5.
- 6) この前年 Voltaire, Siècle de Louis XIV. 出づ。
- 7) J. R. McCulloch, Account of the Lives and Writings of Quesnay, Adam Smith and Ricardo. pp. 19-20.
- 8) J. Rae, op. cit. p. 26.; D. Stewart, op. cit. p. 9.

示する諸原理』と云ふ表題がついてゐるが、哲學的研究の普遍的な動機となれる人間精神の諸原理を尋ね、ニュートンに至るまでの天文學の發達に例をとつて、それを具體的に説明したものであつた。¹¹⁾

その後、彼はヘンリー・ホウムに認められ、招かれてエディンバラ大學の講師となつた。彼の最初の講義は修辭學の立場より見た英文學史であつた。ホウムは後にケイムス卿となりし人で *Sketches of the History of Man* (1774) を著せる傑れたる歴史家であつたが、一切の技術と科學との起源及び發達に關するスミスの著作計畫に對しては、深い興味を抱いてゐた。¹²⁾ 天文學の歴史も勿論この大なる計畫の一部であつた。その他彼の遺稿中に見出さる、『古代物理學の歴史』『古代論理學及形而上學の歴史』も亦その一部であつて、何れもそれらによつて説明さる、『哲學的研究を指導し指示する諸原理』なる表題が附せられてゐる。¹³⁾

四、大學教授としてのスミス

スミスの歴史學的教養と環境

一七五一年、スミスはグラスゴー大學の論理學教授となり、翌年には道德哲學の教授となつた。彼の講義に列りしミラーの言によれば、彼は、モンテスキューから暗示を受けたと思はれる如き計畫に従つて、最も野蠻なる時代より最も進歩せる時代に至るまで、公私の法律思想が漸次進歩し來れる經過を跡づけ、生活及び財産の集積に寄與する諸學問が、之に相應せる法律及び政府の改良又は變更を生ずる効果をもつことを指摘せんと努めたものの如くである。¹⁴⁾ モンテスキューから暗示を受けたと思はれる計畫とミラーの云へる言葉は注意すべきである。『法の精神』は既に一七四八年に出版されてゐた。また、チュルゴの『人類精神の繼續的進歩』は一七五〇年に公にせられ、ヴォルテールは『ルイ十四世の時代』¹⁵⁾ を一七三九年に、『シャールマンよリルイ十三世に至る、諸國民の風習と精神、並に歴史上の主要事件に關する論文』の一部を一七四四―五年に著はしてゐる。スミスがヴォルテールを崇拜せるは、後年親しくフェルネの村を尋ねた位であつた。新らし

- 9) D. Stewart, op. cit. p. 7.
10) F. W. Hirst, Adam Smith. pp. 16-17.
11) Adam Smith, *Essays on Philosophical Subjects*. pp. 3-ff.
12) W. Bagehot. *The Works of Bagehot*. Vol. III. p. 7.
13) Smith, op. cit. pp. 95, 113.
14) D. Stewart, op. cit. p. 12.

い歴史觀を抱けるこれらフランス啓蒙哲學者の影響を受けて、この頃スミスは歴史研究に大なる興味を覺えしものと思はれる。尙、ヴォルテールは、その後、前記の書物以外に、『帝國の編年記』（一七五四年）、『ルイ十五世の時代概観』（一七五五年）、『ピーター大帝治下のロシア帝國史』（一七五—九六年）等の歴史研究を續々發表して行つた。

他の學生リチャードソンの告ぐる所によれば、スミスの講義中に、羅馬帝國没落後に於ける政治的諸制度の性質に關するものと、近代歐洲諸政府中最も顯著なるものゝ發生と發達に關する歴史的説明とがあつたらしい。¹⁶⁾ また、先のミラーもその著『英國政府の歴史的考察』に於いて、自分の若き頃、市民社會の歴史に關するスミスの講義を聞くことが出來、その問題に關して彼と忌憚なき議論を交はし得たと云つてゐる。¹⁷⁾

ヒュームは、この時代の代表的な歴史家であつた。スミスも、彼のことを『現代に於ける最も傑れたる哲學者にして且つ歴史家である』と賞めてゐる。彼との

交友が何時から始つたかは明かでないが、スミスが道徳哲學の教授となりし時彼に論理學の講座を譲らんと努力したことは、その頃より彼らの間に親交ありしことを物語る。當時、ヒュームは英國史の著述を計畫中であつた。彼は、一七五二年七月二十四日附書簡に於いて、最初チューダー王朝（ヘンリー七世）より、英國史の敘述を始めんとせしも、その後豫定を變更し、スチュアート王朝ジェームス一世の治世より筆を起すこととせし旨、スミスに報じ、その意見を徴してゐる。¹⁸⁾ 『英國史』執筆に際し、ヒュームは種々スミスと意見を交換せしものゝ如く、一七五五年二月九日附スミス宛彼の書簡中にも、

『……私は、共和制又は護民官時代の歴史の一部を御送りすべきであつたが、今、それは私の手許を離れてゐる。私はそれを取戻すことが出來なかつた。

議會の偏狹が神の寛大と何の共通點をも有しないと云ふ貴下の意見は全く正しいと私は思ふ……云々』²⁰⁾

と書いてゐる。これは、クロムウエルの共和制が却つて極端なる專制政治に終つたと云ふスミスの見解に

- 15) Hume が初めて歴史に興味を覺えたのはこの書に於てであつた。 E.Fueter, a. a. O. S. 364.
- 16) D. Stewart, op. cit. p. 55.
- 17) J. Millar, Historical View of the English Government. Book II. Chap. X. (cited in J. Rae, op. cit. p. 53.)
- 18) Wealth of Nations, ed. Cannan. Vol. II. p. 275.

對し、ヒュームが同意を表したものである。

大學教授としてグラスゴーに在住中も、スミスは絶えずエディンバラの舊友と親密な交際を続け、休暇には屢々その地を訪問した。この舊友の中には、多くの歴史家があつた。恩人たるケイムス卿もその一人である。ヒュームも其處にゐたし、ロバートソンも亦度々その町を尋ねて來た。後に『市民社會の歴史』を著はせしフアーガツソンもその地にあつた。グザイッド・ゲルリンブルとジョン・ゲルリンブルも共に歴史家であつた。(前者は『スコットランド編年記』を、後者は『大英帝國及びアイルランド回顧録』を著はした)。これらの人々は何れもスミスと親しい仲であつた。彼らは一七五四年、Select Society なるものを組織したが、その會員中には、後に『言語の起源と進歩』の著者となつたモンボードーの名も見出される。スミスはロバートソンなどと共に、『エディンバラ評論』を創刊せしこともあつた。²¹⁾

『道德情操論』The Theory of Moral Sentiments が公刊されたのは、一七五九年であつた。この書は大學教

スミスの歴史學的教養と環境

授としての彼の學問生活の最高峰を形づくるものであり、勿論、哲學乃至は倫理學に關する理論的研究であつた。併し乍ら、その内容から云へば、それは、或意味に於いて道德的感情の起源と發展とを説ける歴史であると見ることも出来るであらう。その根本概念となる同情の心は、道德的なものゝ發展原理とも解し得るであらう。彼は決して、規範的な倫理學を考へたのではない。經驗的な、説明的な倫理學を考へたのであつた。²²⁾そこでなされた心理的事實の分析は、彼に歴史を見るの基礎を與ふるものとなつたであらう。尙、この年迄に彼の周圍では、ヒュームが『英國史』のチューダー王朝及びスチュアート王朝の部分を完成し、その間、『宗教の自然的歴史』を著してゐるが(一七五七年)、ロバートソンの『スコットランドの歴史』が出たのもこの年であつた。

『道德情操論』の末尾には、『法律及び政治に關する一般的原理について、更に、公正に關することのみならず、政治、財政、軍事、その他、法律の對象となる

第三十五卷 一四七 第一號 一四七

19) J. H. Burton, Life and Correspondence of David Hume. Vol. I. p. 375.

20) ibid. Vol. I. p. 418.

21) J. Rae, op. cit. pp. 101. ff.

22) Vgl. W. Hasbach, Untersuchungen über Adam Smith. S. 122. u. 327.

あらゆる事項に亘り、一般的諸原理が、社會の種々なる時代に於いて經過せし種々なる變革について、説明を與ふべき』他の著述を計畫中である旨の豫告が見出される。²³⁾これは、まさに、先に述べしミラーの傳ふる講義の内容に相等し、即ち、人類の一大文化とも云はるべきものを含む筈であつた。

後年發見された彼の講義案には、右の内、政治、財政、軍事に關するものがあり、それは、遅くとも恐らく一七五九年に講義されたものらしい。その一部には次の如く書かれてゐる。

『第三に、商業史、こゝでは古今に於ける、富裕の進歩の遅き原因を尋ね、何れの原因が農業なり、或は諸工業なりに影響するかを示すであらう。』

この項目の下で、彼は、富裕の進歩の遅き原因を自然的障礙と政府の抑壓とに求め、特に後者に關する種々の歴史的考察をなし、更に、それに關聯して、土地所有制度の變遷、商工業の歴史等を説いたのである。²⁴⁾

一七六一年には、ヒュームの英國史が完結し、History of England from the Invasion of Julius Caesar to the

Revolution of 1688 と云ふ表題の下にまとめられたが、この年、スミスも亦、『道德情操論』の第二版を出版し、それには、『言語の最初の形成に關する考察』 Considerations concerning the first Formation of Languages and the Different Genius of original and compounded Languages なる附録を附した。この論文は、スミス自身も大いに價值あるものと考へてゐたが、彼の歴史研究への關心をあらはし、その研究方法の一斑を示せるものとして、重要な文献であるかと思ふ。それは、理論的な歴史又は推理的な歴史とも云はるべきものであり、直接の資料が缺如せる場合、人間の心理的事實の分析によつて、歴史的現象を推測せんとしたものである。先に著はされたヒュームの『宗教の自然的歴史』²⁵⁾も亦かゝる種類の歴史に屬するであらう。

23) Smith, Moral Sentiments. 10th ed. Vol. II. p. 340.

24) Smith, Lectures on Justice, etc. pp. 127. ff.; Wealth of Nations, ed. Cannan. Vol. I. pp. XXI—XXIV.

25) D. Stewart, op. cit. pp. 32. ff.